

早くも1月が終わろうとしています。少しずつ、朝日が昇る時間も早くなって来ました。まだまだ、寒いですが、皆様に神様のお守りをお祈りしています。

暗闇の支配

聖書を読んでいて、胸が苦しくなることがあります。私たちを救う「明日を開く命の言葉」ですが、救いようのない出来事や、何故許されるのだろうかと思うような悪事や、光の届かない闇が記されているからです。旧約聖書のヨブ記が有名ですが、私はイエス様の受難と死という、十字架のページが、今でもやはり苦手です。

主人公が死ぬというストーリー展開は、時として禁じ手のように映画やアニメに使われて、観る人に衝撃を与えます。福音は、その「元祖」と言えるかも知れません。もちろん、復活と聖霊降臨という出来事が、その先にはあります。ですから、希望が失望に終わることはありません。けれども、時には立ち止まって、失望を受け止めることは、私たちの世界を知るための、大切な経験となります。世界には、暗闇の支配があることを、私たちは知らなければならないのです。

ユダと、群衆と、弟子たち

ルカは「ユダという者が」と記しています。これは一説では「ユダというやつ」という軽蔑の気持ちを込めた呼び方だとも言われています。病魔が誰にでも襲いかかるように、天災が善悪の区別なく降りかかるように、人の心変わりも猫の目の色と同じくらい、変わりやすいものです。福音書を記したルカにとって、ユダという存在は、どれだけ許しがたかったことでしょう。その裏切りの行為もまた「接吻をしようと近づいた」とだけ記し、決定的瞬間の描写を避けているようにも読み取れます。今ふうに言えば「ぼかし表現」です。群衆も、弟子たちも、その濃淡の差はあれ、イエス様を暗闇の支配から引き出すことはできませんでした。ユダは、この瞬間も、彼の屈折した心理の中では「私はあなたを愛していますよ」と言っていたかも知れません。「神の子なんですから、これくらい平気ですよ」と。けれども、それは自分勝手な理屈でした。イエス様の言葉は「今は闇が力を奮っている」でした。

丑三つ時

私たちには、主の御心から外れてしまう、罪という性質があります。聖書は、そのことをはっきりと教えています。そして、その性質が、救い主を受難と死に至らしめたと語ります。丑三つ時（午前2時）の、どうしようもない暗闇は、私たちを打ちのめして、うなだれさせます。ただ一つ、私たちの希望は、悪魔は時を支配できないということです。この闇も永久ではありません。復活の朝が訪れる日、罪は罪であったということが、暴露されるのです。主の苦しみと悩みを、偲びましょう。